

月刊 モーストーリー・クラシック

300
yen

Mostly

The
Sankei
Shimbun,
Tokyo
vol.40

Classic

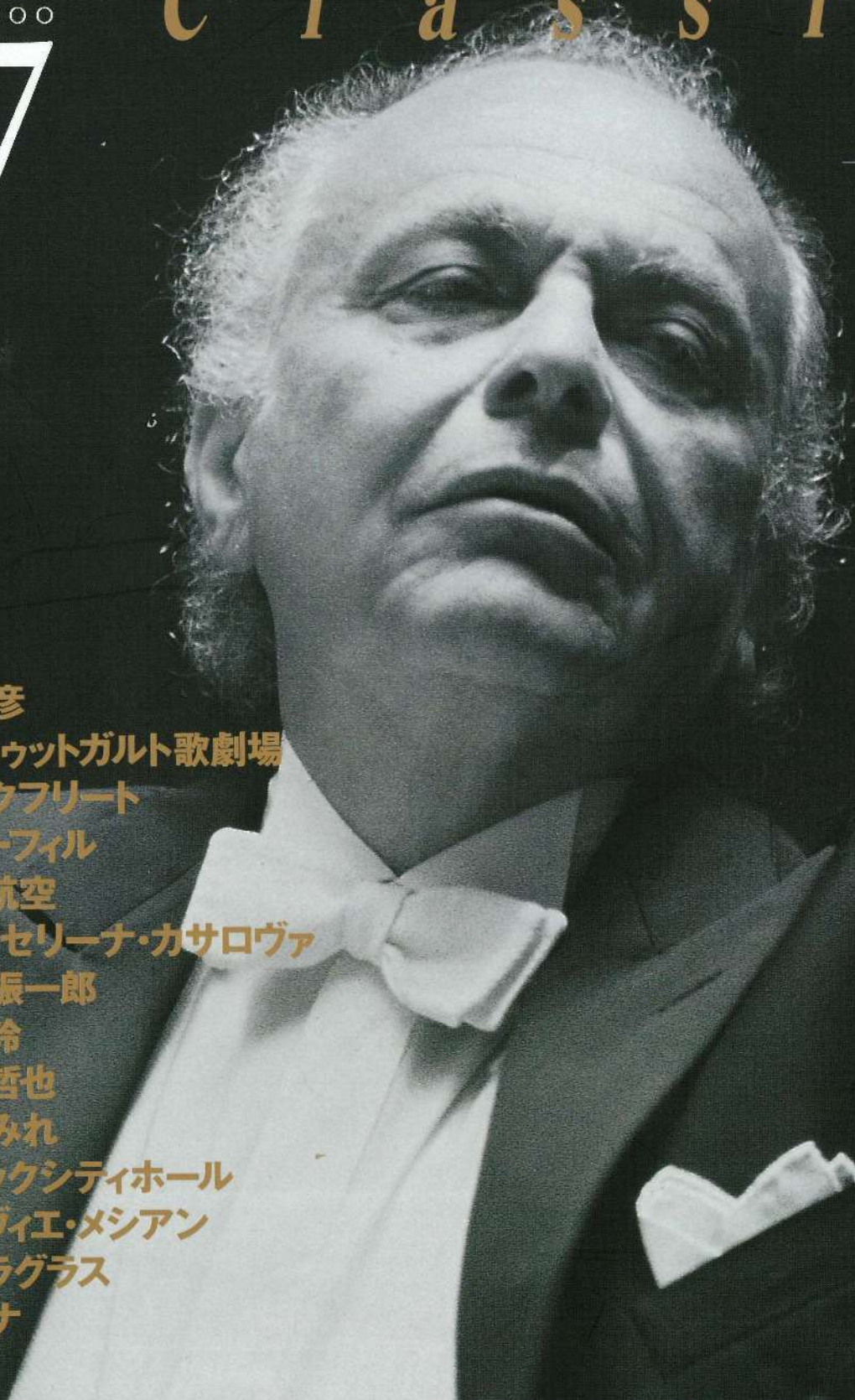
2000

7

特集

巨匠、現在進行形

西和彦
シュトゥットガルト歌劇場
ジークフリート
リコーフィル
日本航空
ヴェッセリーナ・カサロヴァ
中野振一郎
江口玲
熊川哲也
愛華みれ
ソニックシティホール
オリヴィエ・メシアン
オペラグラス
ハンナ



西

文・アスキー副会長

Dr. Kazuhiko Nishi

和

彦

コンピューターがまだ研究用や大企業のための
大がかりな装置だった頃から、
コンピューターと人間のあるべき姿を見つめていたのが西さんだ。
マイクロソフトのビル・ゲイツ氏と、
パーソナル・コンピューターのパイオニアとして、時代を切り開いてきた。
来るべき「電腦社会」にさらなる情熱を傾けるが、
激務の合間に静かにヴァイオリンの調べに身を傾けるのだという。

音楽は瞑想だ

本当に好きな音楽を聴いている時の精神状態は、瞑想状態に似ているようだ。ある日、ある時、どうして無性に好きな音楽を聴きたくなるのだろうか。しかも、好みの音楽があつて、心地よい聴き方を求めるのか。音楽を聴きながら思い至った結論が、「純粹な感動がそこにあるから」だということだった。

脳波には α 波と β 波があり、純粹な感動をしている時には α 波がたくさん出ている。映画を見ても感動するが、音楽には、ニコニコ、シクシク、ドキドキを重ねて到達する映画の世界とはまた違つ

た感動が存在するように思う。音楽の持つ強い力があつて、音楽を聴くことで人は肉体的にも精神的にも癒されるのではないかと思つている。

悲しい時に悲しい音楽、嬉しい時に嬉しい音楽を聴く。その時の嬉しさや悲しさという感情は、何も交さつていないシンプルで、ビュアな感情そのもので α 波状態である。交じりつゝ気のない純粹な感情や感動。それ自体が得難く、すばらしいもので、それをもたらしにくれるのが、癒しという音楽の力ではないだろうか。

生活の中での感情はすごく複雑なものだ。楽しいけど嫌だとか、嬉しいけれども愛いがちよつぱりあり、かつジェラシーもはらんでいたりとか、嫌いだけれどもお金が欲しいとか、実に色々な感情が同時に交錯している。しかし、僕が音楽から得られる感情というのは、それらを超越した大きな存在で、かつ極めて純粹でシンプルなものなのだ。

ピアノとフルート

僕の音楽遍歴はというと、小学生の頃だったか、「ピアノよりも先にヴァイオリンを習いなさい」と母親にいわれ、どうしてもイヤだとタタをこねたことを思い出す。そうこうするうちピアノを習う羽目となり、少しばかりの間レッスンに通つた。

ところが、うまく弾けないものだから先生からは毎回ビシッ！さらに先生のお嬢さんは茜ちゃんといって、将来はプロにと期待がかけられたピアノの上手な女の子がいた。彼女は、大きくなって袖のない演奏会用ドレスを着てもいいようにと、種痘の注射を腕にしなかつたというほどで、子供心に「そこまでやるのか。僕にはとてもできない」と思つたのだ。

それでもある時、お気に入りのブルグミュラーの曲を家で弾いていて、テープに録音してみたことがある。ところが、再生してびっくり、本当に楽しく弾いたはずの演奏が、とんでもなく下手で絶望する音ばかりなのだ。大変がっかりして、僕はピアノを弾くことをやめてしまふことになる。

しかし、ヴァイオリンはイヤだといった手前、もう戻れない。中学時代はフルートを吹いた。そして、ランパルやニコレに憧れた。よせばいいのに、これまた自分の演奏を録音して、下手な音を聞いて、挫折してしまつた。でも、この時、下手な音は安物のフルートのせいだと考え、習つていた先生に頼み込んで村松の純金のフルートを、晩だけ借りることにした。光り輝くフルートを手に意気揚々と挑戦してはみたが、果たせるかな、音は変わらず自分の実力のなさを痛感させられる結果となつた。

悪童たちの音楽会

高校時代は音楽に対して一皮剥け

にし・かずひこ ■ 1956年、神戸市生まれ。早稲田大学理工学部在学中の77年にアスキー出版(現アスキー)を設立、雑誌「アスキー」を創刊する。78年から副社長を務め、翌年からは提携先の米国のマイクロソフト社の新技術担当副社長を兼任する。81年、スタンフォード国際研究所研究員。87年にはアスキー社長に就任した。出版、ソフト、半導体の開発・販売やパソコン通信サービスなどベンチャー企業の草分け的存在。98年より尚美学園大学教授に就任。99年から県立宮城大学事業構想学部客員教授も務める。2000年にアスキー副会長。情報学博士。

たのか、あるいは墮落したのか変な高校生だった。バロック音楽に傾倒して、弦やフルート、そして、ピアノをやっている友人と弦楽合奏のまねごとのようなことをして楽しんでた。大阪にある日本テレマン協会の指揮者でオーボエ奏者の延原武春さんは僕たちの「憧れの音楽家」で、今というミーハーの「追っかけ」をしていたのだ。

ヘンデルの「メサイア」はスコアをすっかり暗譜して、年末の演奏会に出かけては、ミスに目を光らせ、友達同士で「今日のは何回間違えた」なんて、結構オタクっぽいことをやっていたのだ。今でも「メサイア」は歌える。

いつもチェンバロを聴かせてくれた小林道夫さんも憧れの対象で、「ああ、オレたちもいつかチェンバロが弾きたいなあ」と毎日思い続けていた。そんな時、仲間と思いついたのが、学校でいつも見ているピアノにチェンバロのような音を出させるというアイデアだった。

アップライトのピアノのふたを開け、ハンマーに押しピンを打ち込み、ピンの頭

音楽がもたらす純粋な感動。
それが音楽の癒しの力ではないだろうか。
思うままに音楽を表現できる
コンピューターがあったら、
何と素敵だろう。

の金属部分でピアノの弦を叩いたのだ。本物のチェンバロは、山羊の爪で弦を弾いて音を出すのだが、我らの「押しピン・チェンバロ」もなかなかのものだった。スタックカードを効かして演奏すると、本物そっくりの音が出て、実に楽しかった。

しかし、悪事は長続きするものではない。ある日、すっかりきれいに取り除いたはずの押しピンを一本取り忘れてしまったのだ。音楽の先生から使ったのは誰だと迫及の手がすぐに及び、「押しピン絶対禁止!!」なんてお触れが出てしまったことが昨日のことのように懐かしい。

コンピューターと音楽

大学生になると今度は、シンセサイザーを使って音楽と向かい合うようになる。シンセサイザーで音そのものを合成したり、創作したりというのでなく、コンピューターとつないでバッハなどの音楽をいかに演奏するかというのを研究していた。

楽譜を打ち込んで、音符を一つ置きに演奏させたり、メロディーの高低をひっくり返したり、今から考えると滅茶苦茶なことをやっていた。面白かったのは、

自宅のオーディオセットの前で。「世界で一番値段の高いCDプレーヤーと、世界で一番値段の高い真空管アンプと、世界で一番高いスピーカーをつないでも最高の音はしない。音楽の本当の質を知っている人間が作り出したものが最高の音楽を奏でってくれる」と語り、そのこだわりようは半端ではない。歌っている人の叫び、胸の振動、体の揺れを伝えるには、今のハイファイを超えた次世代のウルトラ・ハイファイが必要というが、デジタル技術はそれをかなりのところまで実現してくれると信じている。



曲そのものを後ろから逆行するように演奏すること。機械ならではだが、これがそれなりに面白い音楽になる。シェーンベルクやシュトックハウゼンの作曲技法の一端をかいま見たようで、作曲というのいいなと専門的に勉強したのだが、次第にコンピュータそのものが面白くなってしまった。あとになってマイクロソフトでBASIC言語の開発の時に、PLAYという名前の命令を付け加えることができたのは、こういう経験があったからだ。

会社を始めて、コンピュータの世界に入ってしまったら、世の中はCDの時代に突入した。確か八二年だったと思う。ビル・ゲイツと事業展開を練っていた、ソニーの大賀会長を訪ねたときに「今度こういうものを出すんだ」と見せてくださったのが発表前のCDである。ゲイツはそれを見てすぐさま、「これには音楽だけでなく、映画もコンピュータのソフトも入るはずだ」と言い出し、それがCD-ROMという名前になって、大賀さんとゲイツの最初の出会いともなっている。

「四季」を「指揮」する

CDを聴くと思わず体を動かしてしまいが、何をしようと関係なく演奏は続いていく。実はヴィヴァルディの「四季」が好きで、CDを百枚ほど持っている。実際に様々な演奏があつて、一つの曲にこ



96年、モーツァルト週間にてぎわうザルツブルクを訪れた。市内のホテル、エステルライヒャー・ホーフではノーベル平和賞受賞者のエリー・ウィーゼル、ザルツブルク音楽祭総監督のジェラルド・モルティエらとフィリップ・グラスの「ピース・シンフォニー」の作曲委嘱についてディスカッションを重ねた。西さんの左はソニー・クラシカル社長のピーター・ゲルブ氏。

んなに解釈があるのかと驚いてしまう。「比較」と「分類」という、僕の仕事の性質が顔を出し、楽譜は一つなのにこんなにも様々な表現が許されるのかと考え、僕なりの「四季」をいつか「指揮」してみたいと思うようになった。

大平正芳さんが総理大臣になられたときに「指揮者のような総理大臣になりたい」と言われた話を覚えていて、「指揮者のような社長になりたい」と社長になったときに言ったことがあるが、この話を同じ飛行機に乗り合わせた小澤征爾さんにしたら「それじゃ足りない」と言われたことがある。演奏者の人事権を持つ「音楽監督」になりなさいと小澤さんは言った。大勢の音楽家を前にした指揮者というのは端から見るとカッコいいものではない。大変な仕事だ。あの曲のこの部分をこんな風にオーケストラに演奏してほしいという願望は募るばかりだ。

コンピュータにオーケストラスコアを覚えさせ、解釈を細かく入れていつ、自分のスタイルや好みに乗せた演奏をしたいと考えている。ハイファイ技術も含め、まだまだ越えなければならぬ障害が多いが、何とか実現したいと思っている。制約やしがらみに捕らわれることなく、音楽の好きな人が、思う存分好きな音楽を自分の思うままに演奏させることができるようなコンピュータがあつたら、何と素敵だろうと考えている。

クレモナのヴァイオリン クライスラーへのオマージュ

私の一枚



●クライスラー：テンポ・ディ・メヌエット／ルイ13世の歌とパヴァーヌ／コレリリ主題による変奏曲／シチリアーノとリゴードン／アンダンティーノ／ロンドンデリー・エア、他全18曲

サルヴァトーレ・アッカルド（ヴァイオリン）
ローラ・マンツィーニ（ピアノ）

fone 95F01CD/F
輸入盤オープン価格

このアルバムを聴くたび、子供の時にヴァイオリンを習いたくないといったことをいつも後悔するという。中でも「コレリリの主題による変奏曲」は大のお気に入り。これは一生聴くと思いい、同じものを4枚、あった在庫をすべて買って来たという惚れ込みよう。「どんな時にもこれを聴くとハッピーな気分になしてくれる」